山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第９集

妻神遺跡・真福寺遺跡・手古松遺跡
市川北遺跡・勝沼氏館跡・藤垈遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

１９８５．３

山　梨　県　教　育　委　員　会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

序

本報告書は、1982・83両年度に実施した笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴う事前発掘調査の結果をまとめたもので、対象遺跡は妻神遺跡（一宮町）以下6遺跡であります。

これらの遺跡の所在地は、山梨市・一宮町・勝沼町及び境川村の4市町村で、甲府盆地の東部から南東部に位置しており、縄文時代や古墳時代の遺跡が濃厚に分布し、律令時代には甲斐の政治・経済の中心地として繁栄した地域に属しております。例えば妻神遺跡の所在する一宮町は、隣りの勝沼町にかけて縄文時代を中心とする釈迦堂遺跡群が存在することで有名ですが、律令時代には国分寺・国分尼寺が置かれ、両寺跡とも現在国史跡に指定されております。

ただしこれらの遺跡は、比較的調査区域が狭く、かつ遺跡密集地をやや外れて位置するため、市川北遺跡（山梨市）・勝沼氏館跡（勝沼町）・藤垈遺跡（境川村）の3遺跡については、期待された遺構は残念ながら検出されませんでした。

一方、妻神遺跡からは、平安時代末期の住居址1軒と時期不明の溝2本とが発見され、住居址からは土師器・鉄製鎌・切子玉・ガラス製小玉などが出土し、『和名抄』にいう「山梨郡能呂郷」を形成する集落の存在を想定することができました。また真福寺遺跡（境川村）からは縄文時代の土坑1基と土器片・石器などが発見されましたが、同じ村の手古松遺跡からは古墳時代後期の住居址1軒と多数の各種土師器とが発見され、付近に群集する後期古墳との関係、いわゆる集落と墓域との関係を解明する1つの手掛りを得ることができました。

以上、断片的な成果ですが、当該地域の原始・古代史研究の資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に従事された皆様方に、改めて厚く御礼申し上げます。

1985年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯　貝　正　義

例　言

1. 本報告書は、昭和57年度、58年度の笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴って発掘調査された遺跡の内、下記の６遺跡の調査報告書である。

   妻神遺跡・真福寺遺跡・手古松遺跡・市川北遺跡・勝沼氏館跡・藤垈遺跡

2. 発掘調査は、山梨県教育委員会が農林水産省関東農政局の委託と文化庁の国庫補助金を受けて実施した。

3. 発掘調査は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。

4. 本書の編集は森和敏、中山誠二が行い、執筆はⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵを中山が、Ⅱを森が担当した。

目　次

序
例　言
目　次
挿図目次
調査組織
Ⅰ　妻神遺跡 …… 1
1.　調査経過
2.　遺跡と周辺の環境
3.　遺構と遺物
4.　まとめ
Ⅱ　真福寺遺跡 …… 7
1.　調査経過
2.　遺跡と周辺の環境
3.　遺構と遺物
Ⅲ　手古松遺跡 …… 11
1.　調査経過
2.　遺跡と周辺の環境
3.　遺構と遺物
4.　まとめ
Ⅳ　市川北遺跡 …… 23
1.　調査経過
2.　遺跡と周辺の環境
3.　調査結果
Ⅴ　勝沼氏館跡 …… 25
1.　調査経過
2.　遺跡と周辺の環境
3.　調査結果
Ⅵ　藤垈遺跡 …… 27
1.　調査経過
2.　遺跡と周辺の環境
3.　調査結果

挿図目次

第１図　妻神遺跡位置図 …… 1
第２図　妻神遺跡調査区域図 …… 2
第３図　妻神遺跡全景写真 …… 2
第４図　妻神遺跡遺構配置図 …… 2
第５図　妻神遺跡１号住居址写真 …… 3
第６図　妻神遺跡１号住居址実測図 …… 3
第７図　妻神遺跡１号住居址出土遺物実測図 …… 3
第８図　妻神遺跡１号住居址出土土器実測図 …… 4
第９図　妻神遺跡出土遺物写真 …… 5
(1)　１号住居址出土坏形土器
(2)　１号住居址出土皿形土器、坏形土器
(3)　１号住居址出土甕形土器
(4)　１号住居址出土甕形土器
(5)　１号住居址出土ガラス製小玉
(6)　１号住居址出土切子玉
(7)　１号住居址出土鎌
(8)　遺構外出土土器
第10図　妻神遺跡１号溝写真 …… 6
第11図　妻神遺跡遺構外出土土器拓本 …… 6
第12図　真福寺遺跡位置図 …… 8
第13図　真福寺遺跡近景写真 …… 8
第14図　真福寺遺跡土坑写真 …… 8
第15図　真福寺遺跡出土土器拓影 …… 9
第16図　真福寺遺跡出土土器写真 …… 9
第17図　真福寺遺跡出土石器実測図 …… 10
第18図　真福寺遺跡出土石器写真 …… 10
第19図　手古松遺跡位置図 …… 11
第20図　手古松遺跡全体図 …… 12
第21図　手古松遺跡作業風景写真 …… 12
第22図　手古松遺跡１号住居址実測図 …… 13
第23図　手古松遺跡１号住居址カマド実測図 …… 14
第24図　手古松遺跡１号住居址写真 …… 15
(1)　遺物出土状況

(2)　カマド
(3)　住居址完掘状況
第25図　手古松遺跡1号住居址出土土器実測図 …… 17
第26図　手古松遺跡1号住居址出土土器実測図 …… 18
第27図　手古松遺跡1号住居址出土土器写真 …… 20
第28図　手古松遺跡1号住居址出土土器写真 …… 21
第29図　手古松遺跡1号住居址覆土内出土土器拓本 …… 22
第30図　市川北遺跡遠景写真…… …… 23
第31図　市川北遺跡位置図 …… 23
第32図　市川北遺跡調査区域図 …… 24
第33図　市川北遺跡試掘坑写真 …… 24
第34図　勝沼氏館跡調査区位置図 …… 25
第35図　勝沼氏館跡調査区域図 …… 26
第36図　勝沼氏館跡試掘トレンチ写真 …… 26
第37図　藤垈遺跡遠景写真 …… 27
第38図　藤垈遺跡位置図 …… 27
第39図　藤垈遺跡調査区域図 …… 28
第40図　藤垈遺跡試掘トレンチ写真 …… 28

調査組織

調査主体　　山梨県教育委員会
調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター

Ⅰ　妻神遺跡

調査担当者　文化財主事　　小野正文、中山誠二
調査作業員　山下とし子、山本婦美子、早川よし子、山口政子、山口令子、風間たけ子、野沢秋子、斉間みき子、広瀬豊子、小林数美、山口もと代、有泉延子、早川和良

Ⅱ　真福寺遺跡

調査担当者　文化財主事　　森　和敏
調査作業員　榎本勝、相沢正子、斉藤寿子、竜沢みち子、寺本由美子、宮川菊江、宮川さとる、宮沢まさみ、渡辺かほる

Ⅲ　手古松遺跡

調査担当者　文化財主事　　長沢宏昌、中山誠二
調　査　員　塚原明生（日本写真家協会々員）
調査作業員　渡辺礼子、斉藤多喜子、斉藤つね子、江川勝子、宮川好子、宮川とみの
出土品整理作業員　石田文次郎、宝福寿美子、遠藤映子、山本治代、渡辺薫、高野俊彦、羽中田恵子、丸山孝子、広瀬千江美、坂本穂波

Ⅳ　市川北遺跡

調査担当者　文化財主事　　坂本美夫、米田明訓
調査作業員　丸山孝子、坂本穂波、広瀬千江美

Ⅴ　勝沼氏館跡

調査担当者　文化財主事　　長沢宏昌、中山誠二
　　勝沼町教育委員会　　室伏　徹

Ⅵ　藤垈遺跡

調査担当者　文化財主事　　坂本美夫、米田明訓

調査協力機関
境川村教育委員会
勝沼町教育委員会
山梨市教育委員会
一宮町教育委員会

Ⅰ 妻神遺跡

1. 調査経過

昭和58年１月10日、試掘調査を実施し、住居址の一部と考えられる遺構を確認した。付近から出土した土師器片より、この遺構は平安時代のものであることが予想された。

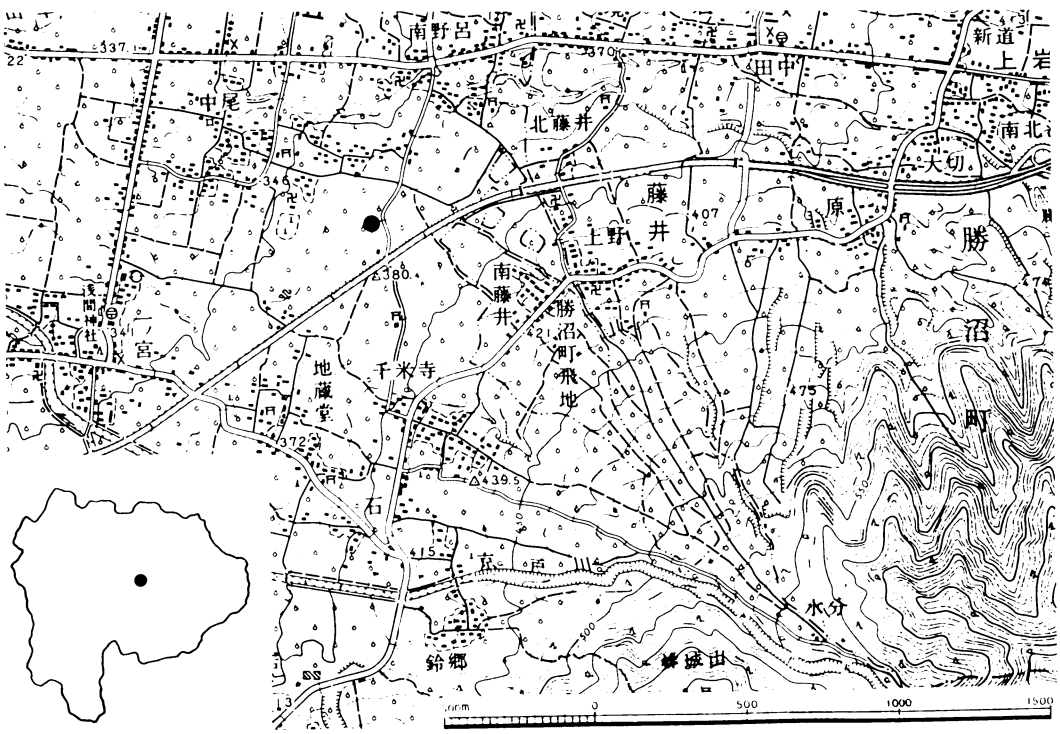
１月12日に、試掘調査の結果を受けて農林省、県文化課、県埋蔵文化財センターの間で発掘調査の打合せが行われた。

本調査は、同年１月17日から24日にかけて、県埋蔵文化財センターが実施した。

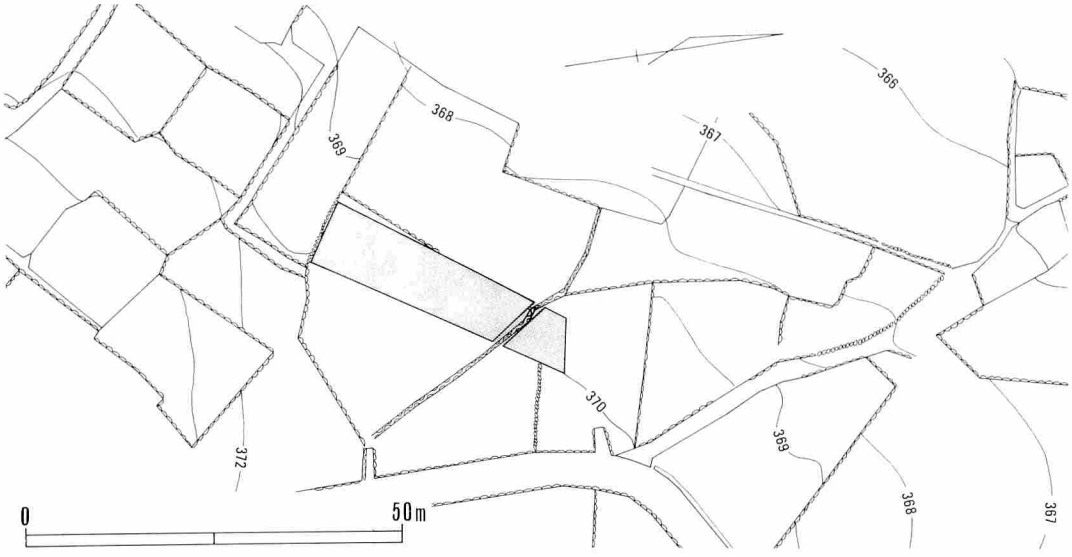
2. 遺跡と周辺の環境

妻神遺跡は、東八代郡一宮町中尾地内に所在する。御坂山地に水源をもつ京戸川によって形成された扇状地扇端部に立地し、標高370ｍを測る。京戸川扇状地は、甲府盆地の中でも有数の規模をほこり、西側を大石川扇状地、北側を日川扇状地に接している。また、本遺跡の北方300ｍは、京戸川扇状地の最先端にあたり、日川扇状地との接点をなし、田草川が西流する。

本遺跡をのせる扇状地上には、縄文時代の遺跡をはじめ多くの遺跡が分布している。中でも扇央部を中心とする釈迦堂遺跡群では、縄文時代の住居址、土坑、土器捨場等の遺構が発見され



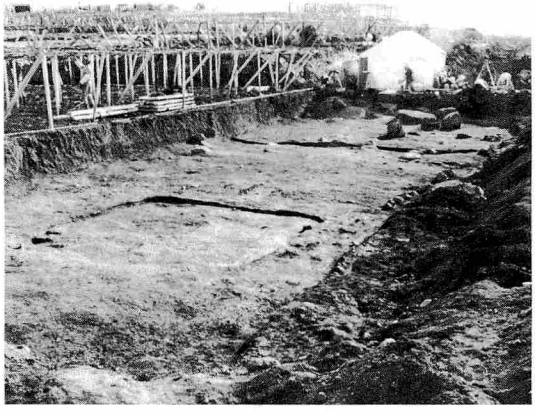
第１図　　妻神遺跡位置図（1／25,000）



第２図　　妻神遺跡調査区域図　　（1／1,000）

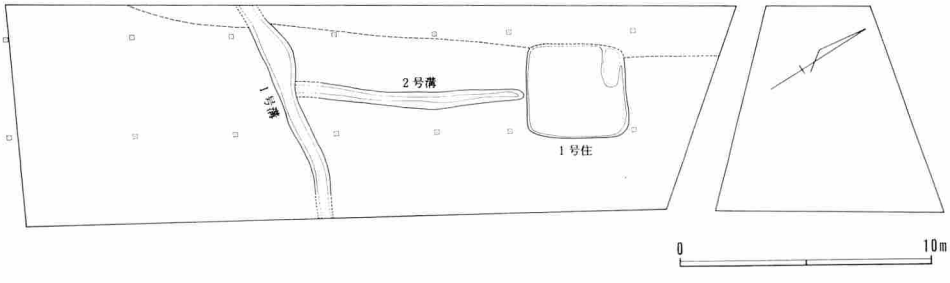
ており、当時の集落の解明に有力な手掛りを与えている。この遺跡の発掘調査を契機として、再度同扇状地上の分布調査が行われ、34カ所の遺跡が確認されている。[注1] その内容は、縄文時代19遺跡、弥生～古墳時代10遺跡、奈良、平安時代～中世17遺跡（複合遺跡を含む）である。

また遺跡周辺の地域は、北野呂、南野呂の地名がみられ、平安時代の『和名抄』に記載される「山梨郡能呂郷」に比定されている。[注2] 同町内には、同様に「林戸郷」の比定地も存在し、当該地域の古代における繁栄をうかがうことができる。



第３図　妻神遺跡全景写真

注 1. 釈迦堂遺跡周辺遺跡分布調査班「一宮・勝沼両町釈迦堂遺跡周辺遺跡分布調査概要」『山梨考古』9号、1983
2. 磯貝正義・飯田文弥『山梨県の歴史』1973, 坂本美夫「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要１』　1984



第４図　　妻神遺跡遺構配置図　（1／300）

3. 遺構と遺物

(1) 1号住居址

遺　構

調査区中央よりやや東側に位置する。西壁が攪乱を受けているため正確な規模は不明であるが、一辺約4mの方形プランと推定される。住居の主軸方向は、W－35°－Nを指す。表土の削平が激しく、壁高は遺構確認面より5*cm*程を残すのみであった。

住居址内には東壁付近にピットが2カ所検出された。南側のピットは直径35*cm*の円形を呈し、中に直径15*cm*の円形柱穴痕が遺存する。柱穴の深さは30*cm*を測る。北側のカマドに近いピットは、一辺20*cm*の正方形を呈し、深さも10*cm*と浅い。西壁付近は攪乱を受けているため柱穴は確認できなかったが、北西コーナーに長さ180*cm*、幅85*cm*、床面からの深さ15*cm*ほどの落ち込みが検出された。長軸方向が住居址主軸方向と一致し、一辺が壁と接しているため、住居に伴う施設として判断した。用途については、貯蔵穴等が考えられるが、内部からの出土遺物もなく詳細は不明である。

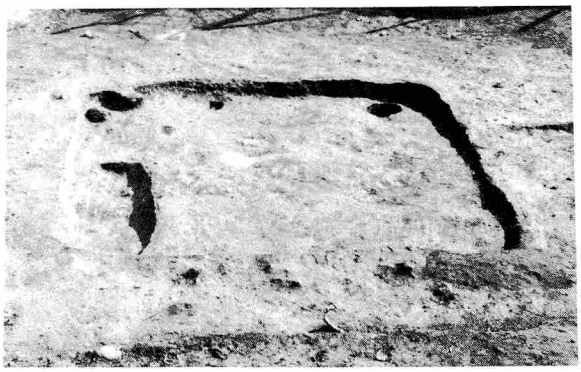
カマドは、住居址北東コーナーに設けられる。付近には焼土がわずかに認められ、袖石に使用されたと考えられる花崗岩が遺存する。出土遺物は非常に少なく、数片の土師器とガラス玉、切子玉、鉄製鎌が床面より出土している。

出土遺物

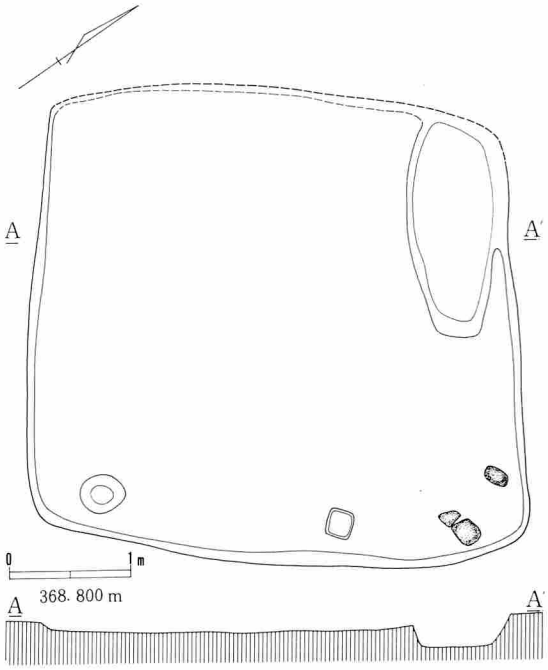
1号住居址から出土した遺物は、土師器、鉄製鎌、切子玉、ガラス製小玉である。

①土器（第8図）

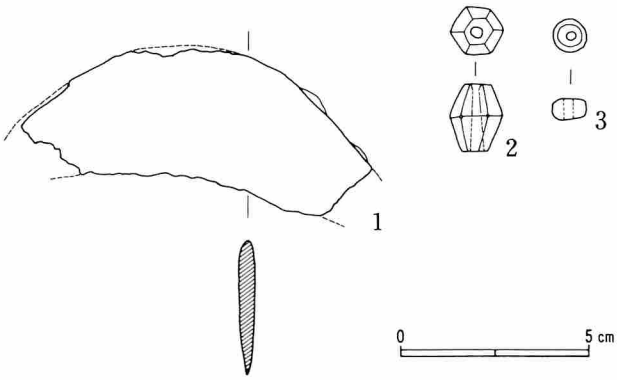
土器は、すべて土師器である。



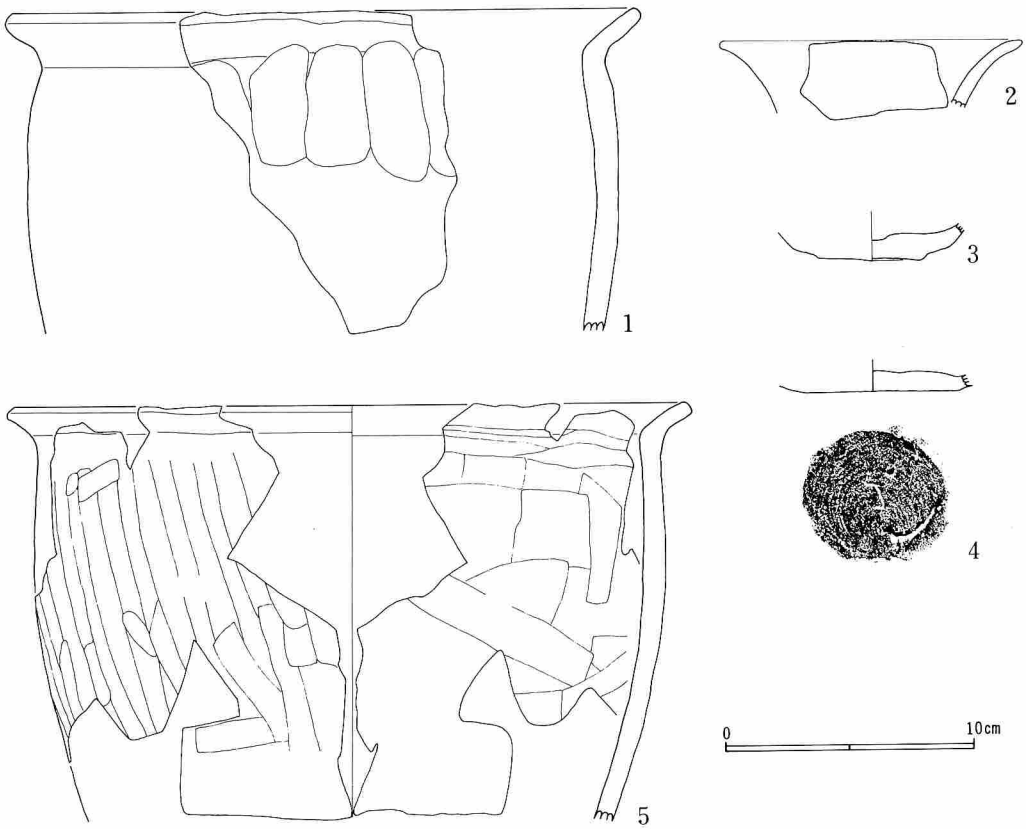
第5図　妻神遺跡1号住居址写真



第6図　妻神遺跡1号住居址実測図　(1/60)



第7図　妻神遺跡1号住居址出土遺物実測図　(1/4)



第８図　　妻神遺跡１号住居址出土土器実測図　　（1/3）

１は、甕形土器の胴部上半の破片である。口径は25.5*cm*、胴部最大径は23.5*cm*と推定される。胴部はやや内湾し、口縁は屈曲外反する。器面の風化が激しく、調整痕はわずかに外面ヘラケズリが残るのみである。胎土は粗く、１㎜大の砂粒を多く含み、色調は暗褐色を呈する。

２は、坏形土器口縁部破片である。口径約12*cm*と推定される。口縁部は外反し、口唇はやや丸味をおびている。胎土は緻密で石英小粒子を若干含む。色調は淡褐色を呈する。

３は、皿形土器の底部と推定される。底径は４*cm*で、わずかながら台を有する。内面底部に指頭大の凹みをもち、胴部はやや内湾するものと考えられる。遺存状態は不良で、器面全体に二次的な焼成を受けたような細かいひび割れが認められる。色調は淡褐色を呈する。

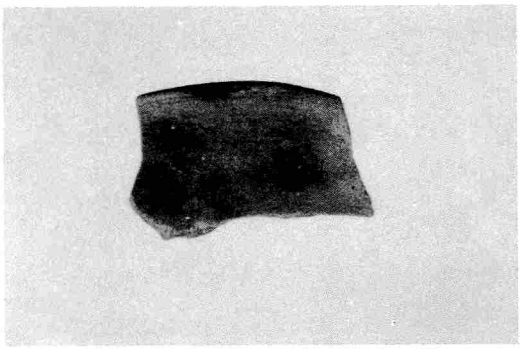
４は、坏形土器底部と考えられ、底径5.5*cm*を測る。底面に糸切り痕をそのまま残す。内面は、指によるロクロ整形痕が認められる。色調は淡褐色を呈する。

５は、甕形土器の胴部上半の破片で、口径27.3*cm*、胴部最大径25.0*cm*と推定される。内外面ともヘラケズリを施す。胎土は、１に比べ精選され、長石粒をわずかに含む。色調は暗褐色である。

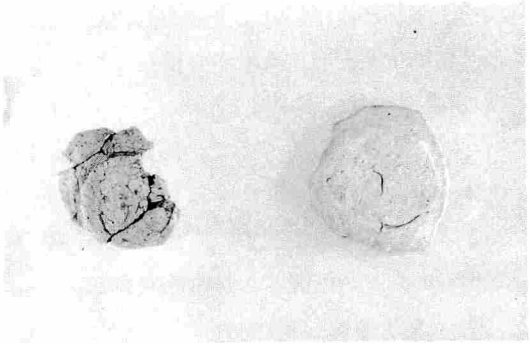
以上の土器は、11世紀後半に比定されよう。

② 鉄製品（第７図１）

鎌の身部で、刀の先端と柄の装着部分を欠損している。最大幅は3.5*cm*で、背部の厚さ0.4

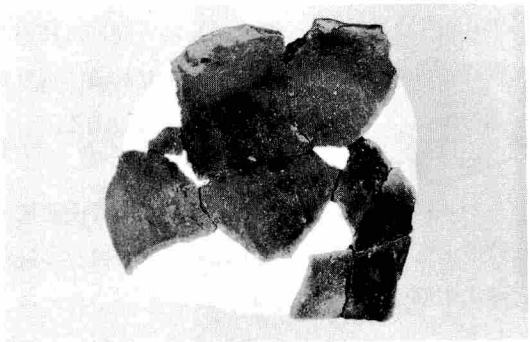


(1)　1 号住居址出土坏形土器



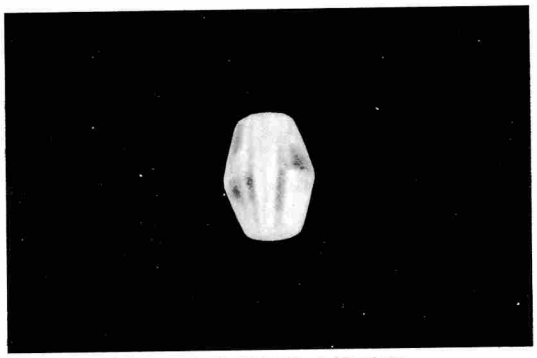
(2)　1 号住居址出土皿形土器、坏形土器

(3)　1 号住居址出土甕形土器

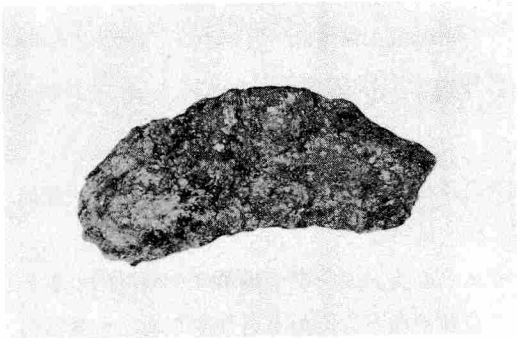


(4)　1 号住居址出土甕形土器

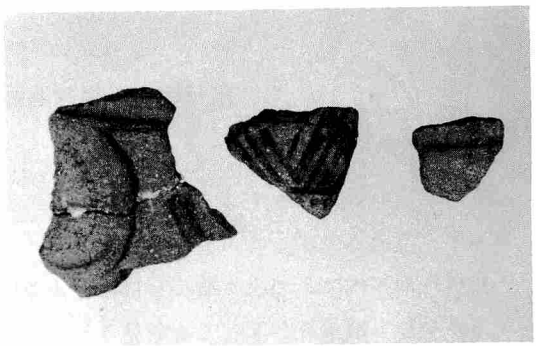
(5)　1 号住居址出土ガラス製小玉



(6)　1 号住居址出土切子玉



(7)　1 号住居址出土鎌



(8)　遺構外出土土器

第 9 図　　妻神遺跡出土遺物写真

cmを測る。形状は、身部全体が内湾し、柄の部分には中茎を有するものと推定される。

③ **装身具（第7図2.3）**

2は、水晶製の切子玉で、長さ1.7cm、幅1.3cmを測る。片面穿孔を施している。

3は、ガラス製小玉で、直径0.8cm、厚さ0.5cmを測る。色調は、濃紺色である。

第10図　妻神遺跡1号溝写真

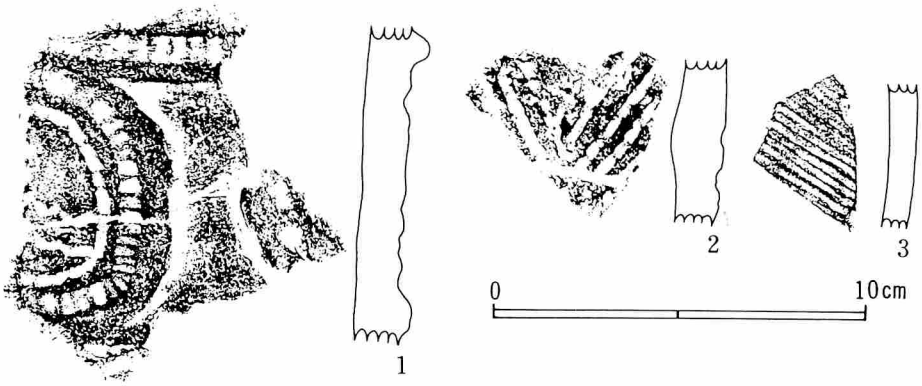
(2) 溝状遺構（第10図）

調査区中央付近より2本の溝状遺構が確認された。1号溝は、調査区長軸方向にほぼ直交し、深さ50cmを測る。2号溝は、1号住居址南壁部より南へ走り、1号溝とまじわる。掘りこみは、確認面から10cmと浅い。両溝からの出土遺物はなく、年代についても不明である。

(3) 遺構外出土遺物（第11図）

1・2は、縄文土器の破片である。外面装飾は、隆帯による楕円形区画と竹管による角押文を特徴としている。胎土は石英、長石粒を多量に含み、色調は茶褐色を呈する。この2点は縄文時代中期中葉に比定されよう。

3は、須恵器の小破片である。外面に平行叩き目を施しているが、形態については不明である。



第11図　妻神遺跡遺構外出土土器拓本　（1/2）

4. まとめ

本調査において明らかにされた遺構は、試掘調査時に確認された住居址1軒の他に溝状遺構2本のみであった。

住居址の年代は、出土土器から11世紀後半期と考えられる。同時期の集落は、同町内の東新居遺跡や笠木地蔵遺跡などでも発見されており、本遺跡の西方に広がる遺物散布地にも集落の存在が推定される。

II 真福寺遺跡

1. 調査経過

国営幹線管水路の敷設予定路線が決定した時点で、遺物の分布調査を行ったところ、少量であるが土器片の散布がみられたので、まず試掘調査を行うことになったものである。

試掘は昭和57年11月8日から同月18日までの間の7日で行った。発掘方法は4メートル×4メートルのグリッドを、路線に沿って横方向に4、縦方向に13、帯状台地を横断するように設定した。

表土からは縄文時代前期末葉の諸磯式土器片と黒曜石片がわずかに出土しただけで、その下層のローム層の間で、以下に掲げる遺物が出土した。遺物は台地の中央部で集中的に出土したことから、遺構の存在も予想されたが、試掘調査の結果、土坑と思われるものが1基検出されただけであった。遺物の内容は縄文時代早期末葉の茅山下層式土器片少量と磨石、凹石が5点である。

試掘を行ったグリッドは、南半分ではちどりに、北半分では1つおきのちどりで、19カ所を掘ったが、遺構がないと考えられたので、本調査に到らずに終了した。

2. 遺跡と周辺の環境

真福寺遺跡は東八代郡境川村前間田小字真福寺352番地の25を中心に広がっていて、八代町に接している。

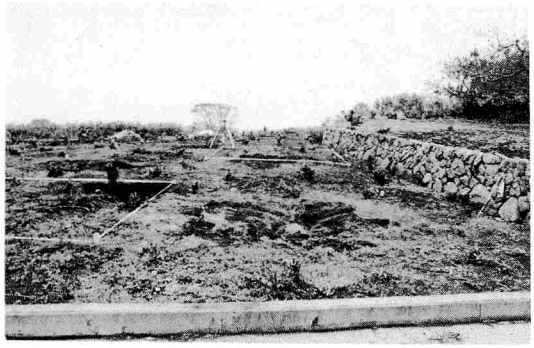
甲府盆地南西側の、御坂山脈中腹にあって、標高425メートルの位置にある。遺跡の南西に接して竜安寺川が流れ、5メートルくらいの比高差となり、帯状台地の上面約50メートルを挟んで、北東側は徐々に下りながら沢となっている。台地の上方は狭く、下方は広くなり、100メートルくらい下には広いフラットな場所があって、そこには縄文時代中期中葉の遺物が散布している。ここまで下ると曽根丘陵となり、縄文時代中期の遺跡が付近にもいくつかある。真福寺遺跡は盆地南東側にあるものの中では、盆地床との比高差では最も高い位置にある遺跡の部類に属するであろう。

遺跡の現状は果樹園で、耕土層が20センチメートル、その下層が遺物包含層で10センチメートルくらいと浅く、最下層はローム層であった。

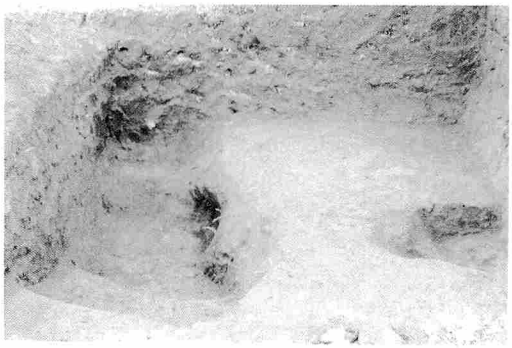
3. 遺構と遺物

土坑と思われるものの1基は南北90センチメートル、東西50センチメートル、深さ40センチメートルで、中から3片の繊維土器が出土した。他に遺構と考えられるものはなかったが、土器片の出土状態からみて、遺構が耕作によって破壊されたと思われる場所もあった。

第12図　真福寺遺跡位置図（1/50,000）



第13図　真福寺遺跡近景写真



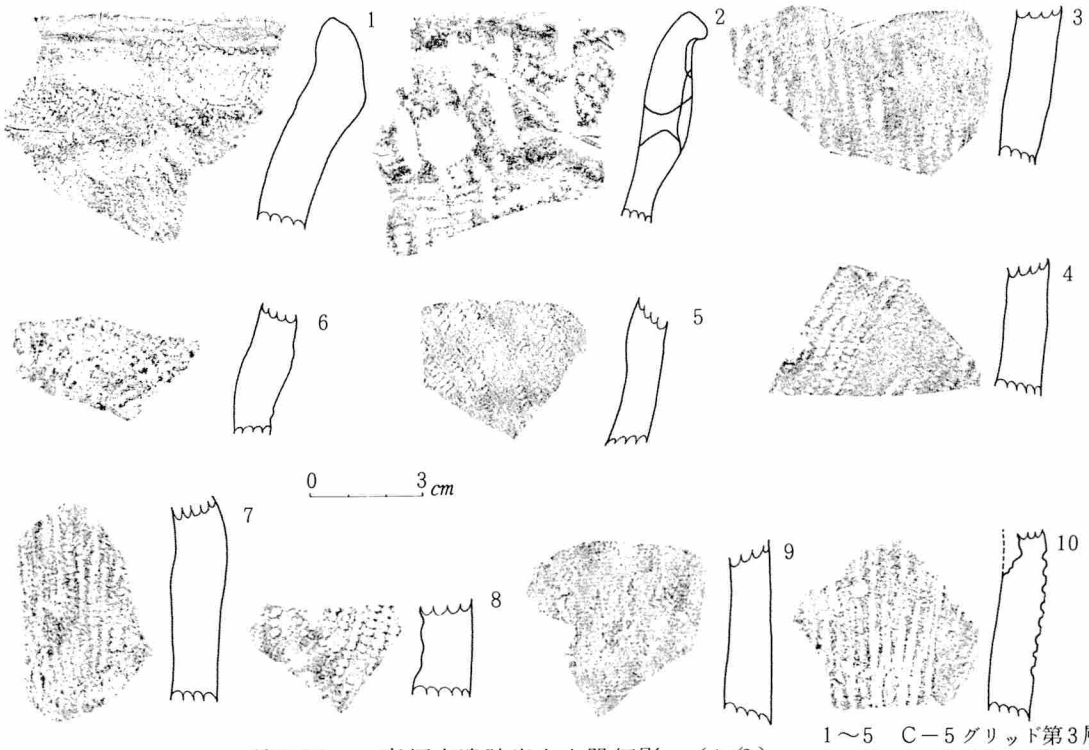
第14図　真福寺遺跡土坑写真

出土した土器片は全て繊維を含んでいて、厚手で、金雲母を混入しているものもある。無文の土器片が最も多く、次に縄文であり、縄文は第15図２以外は細縄文である。３・４・５は同一個体と思われる。細縄文の多くのものは磨消が施されている。２は縄文を地文に、ヘラ状工具で刺突していて、焼成前の穿孔が１孔ある。10は貝殻状条痕文が施文されている。石器は研磨された両面に凹みのある凹石が２個とよく研磨された磨石が３個出土した。

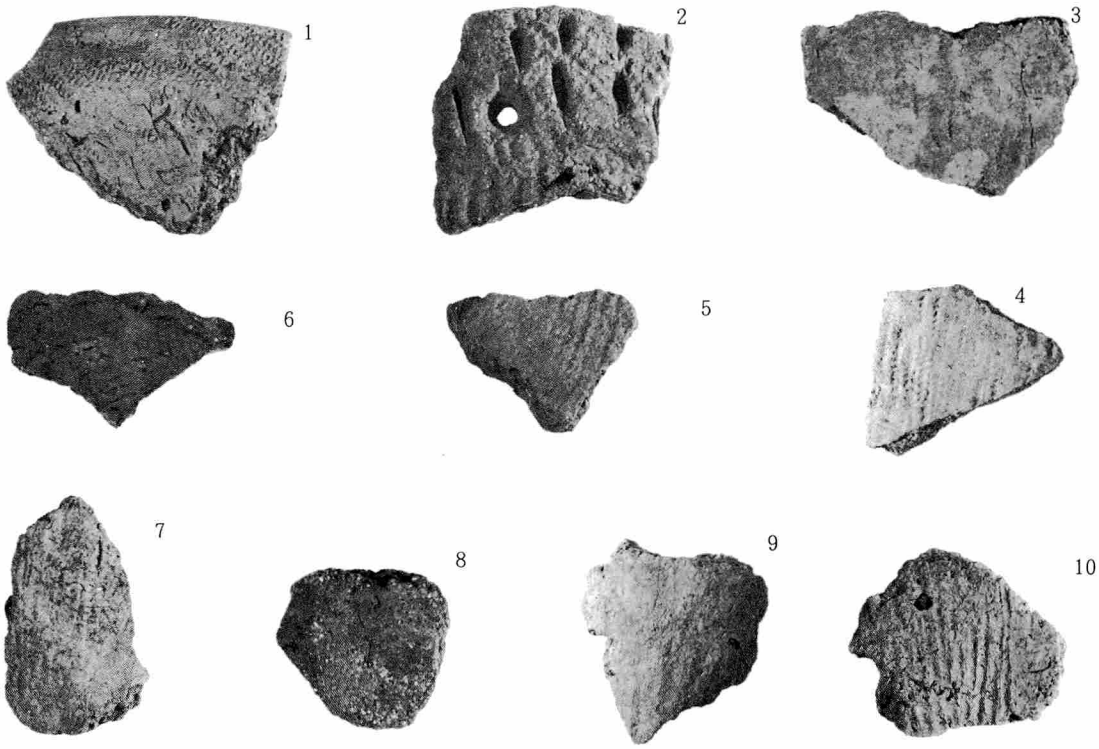
本県では縄文時代前期末葉までの出土遺物は少ないが、近くでは花鳥山遺跡で早期末と思われる土器がみられる。[注1]

本遺跡で出土した遺物は少量であったが、今後の参考資料として貴重であろうと考えられる。

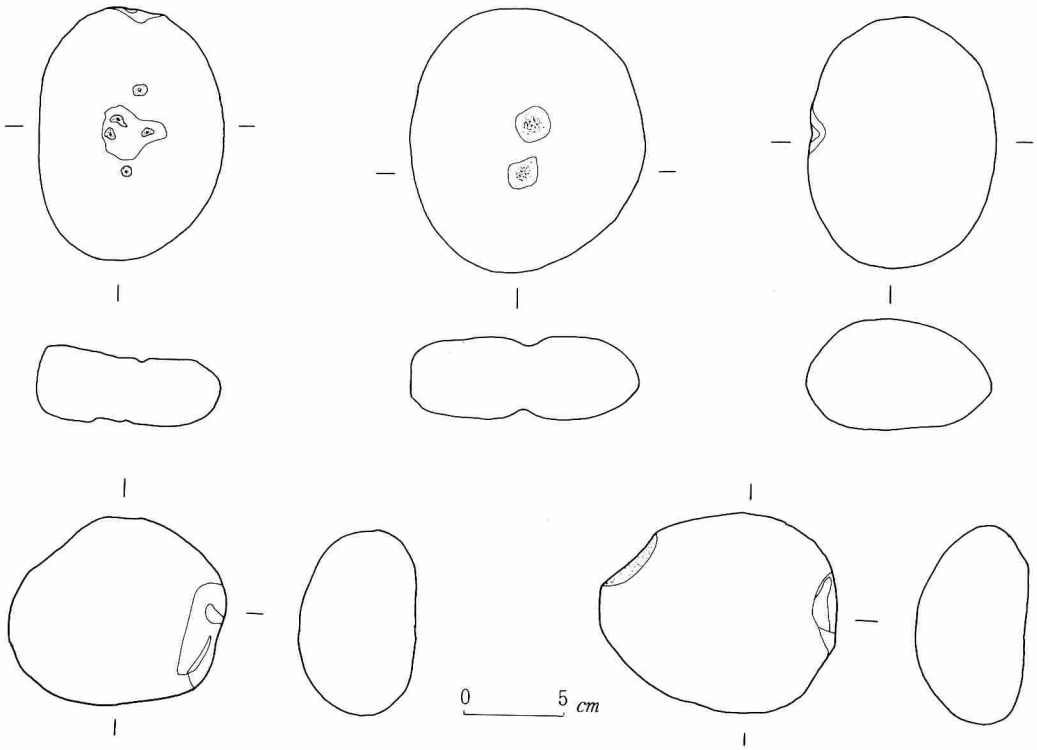
注１　樋口清之「花鳥山石器時代遺跡」『八代町誌』1976



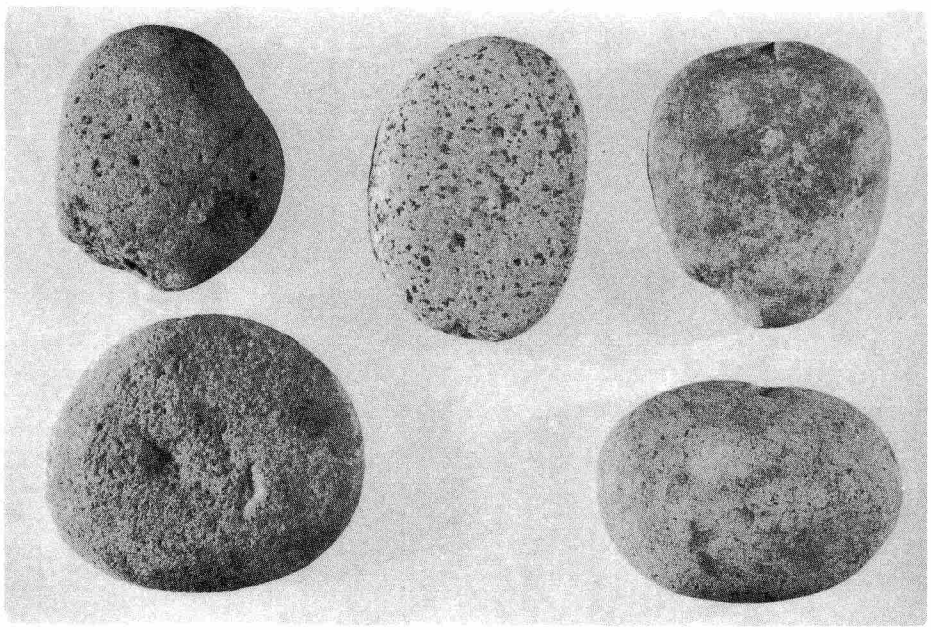
第15図　真福寺遺跡出土土器拓影　(1/2)　1～5　C－5グリッド第3層　6～10　A－5グリッド第3層



第16図　真福寺遺跡出土土器写真



第17図　　真福寺遺跡出土石器実測図



第18図　　真福寺遺跡出土石器写真

Ⅲ　手古松遺跡

1.　調査経過

昭和58年２月に付近の分布調査を行い、遺跡の存在を確認した。

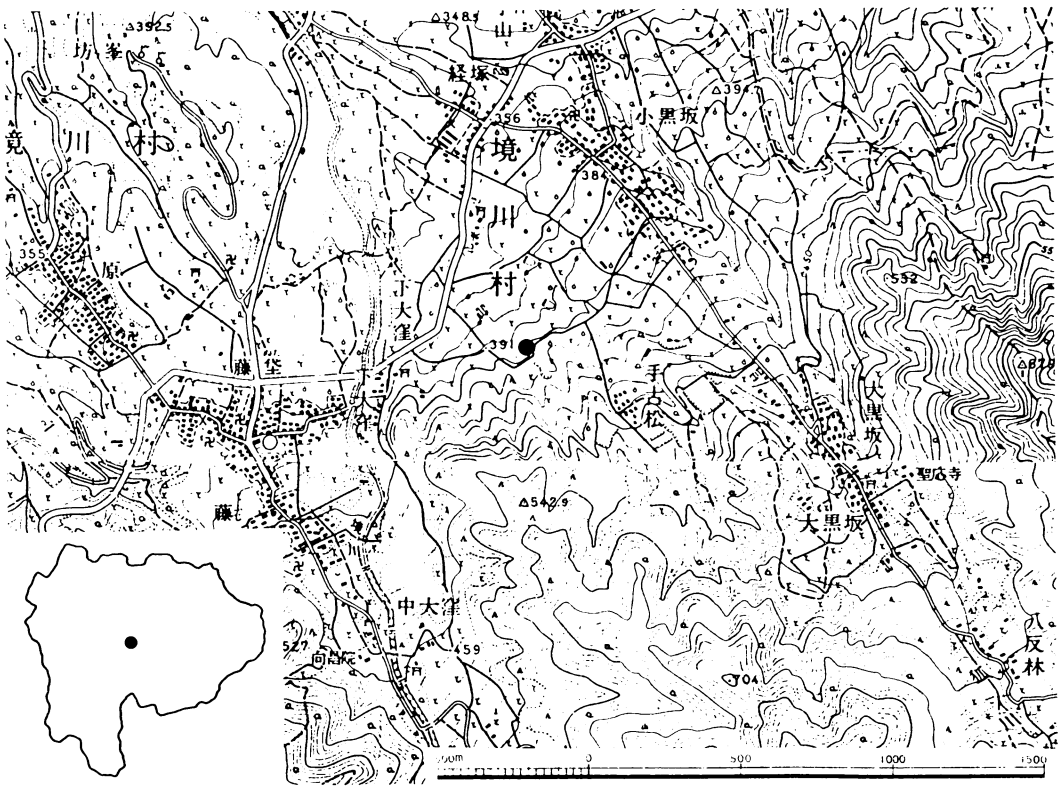
昭和58年９月12日、農林省、県文化課、県埋蔵文化財センター、境川村教育委員会の間で発掘調査の打合せが行われた。

昭和58年10月24日から11月11日にかけて県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

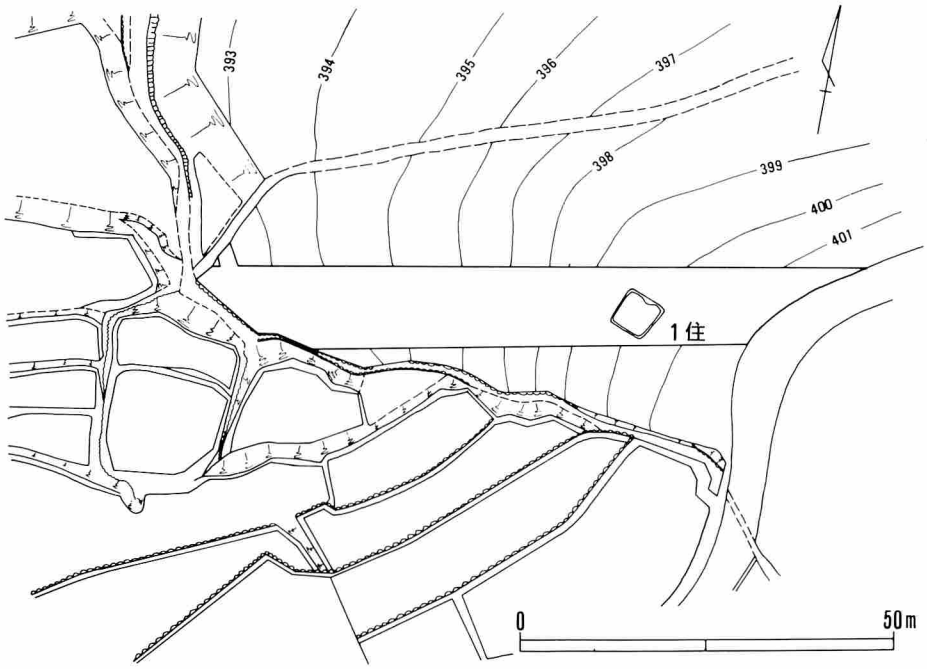
2.　遺跡と周辺の環境

手古松遺跡は、東八代郡境川村小黒坂手古松地区に所在する。御坂山系に含まれる名所山、春日山の山裾と曽根丘陵との接点に位置し、標高約400ｍを測る。遺跡から東方1Kmに狐川が、西方500ｍに境川が流れるが、本遺跡周辺では、両河川の氾濫の影響は認められない。今回、調査の対象となった区域は、西方へ向けて傾斜する山裾の小さな尾根の西側にあたり、西端に沢が走る。

本遺跡周辺地域では、一の沢遺跡、一の沢西遺跡、立石北遺跡など縄文時代の集落跡も存在



第19図　　手古松遺跡位置図　　（1/25,000）

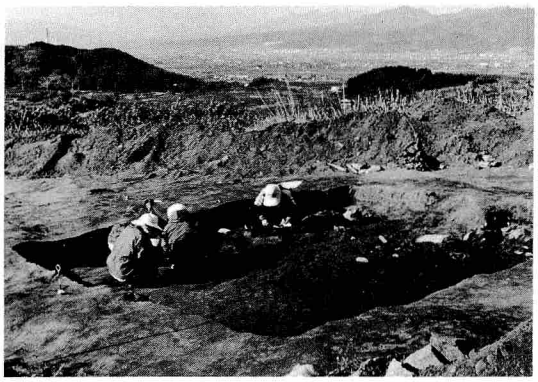


第20図　手古松遺跡全体図　（1／1,000）

するが、特に顕著なものに後期の古墳群がある。『境川村誌』(1978)によれば、同町内には前期、後期を含めて57基の古墳が知られているが、既に開墾等によって削平されたものを含めれば、その数はさらに増加するものと考えられる。特に本遺跡に近い境川、狐川流域沿いには、古墳群の名称こそないが、後期古墳が群集している。これらの群集墳の存在を、該期における生産活動の向上と新たな中・小首長層の伸張の結果として捉えるならば、周辺地域にはその背景となった集落の存在も想定されよう。

3. 遺構と遺物

調査によって、古墳時代後期の住居址が1軒検出された。



第21図　手古松遺跡作業風景写真

(1) 1号住居址

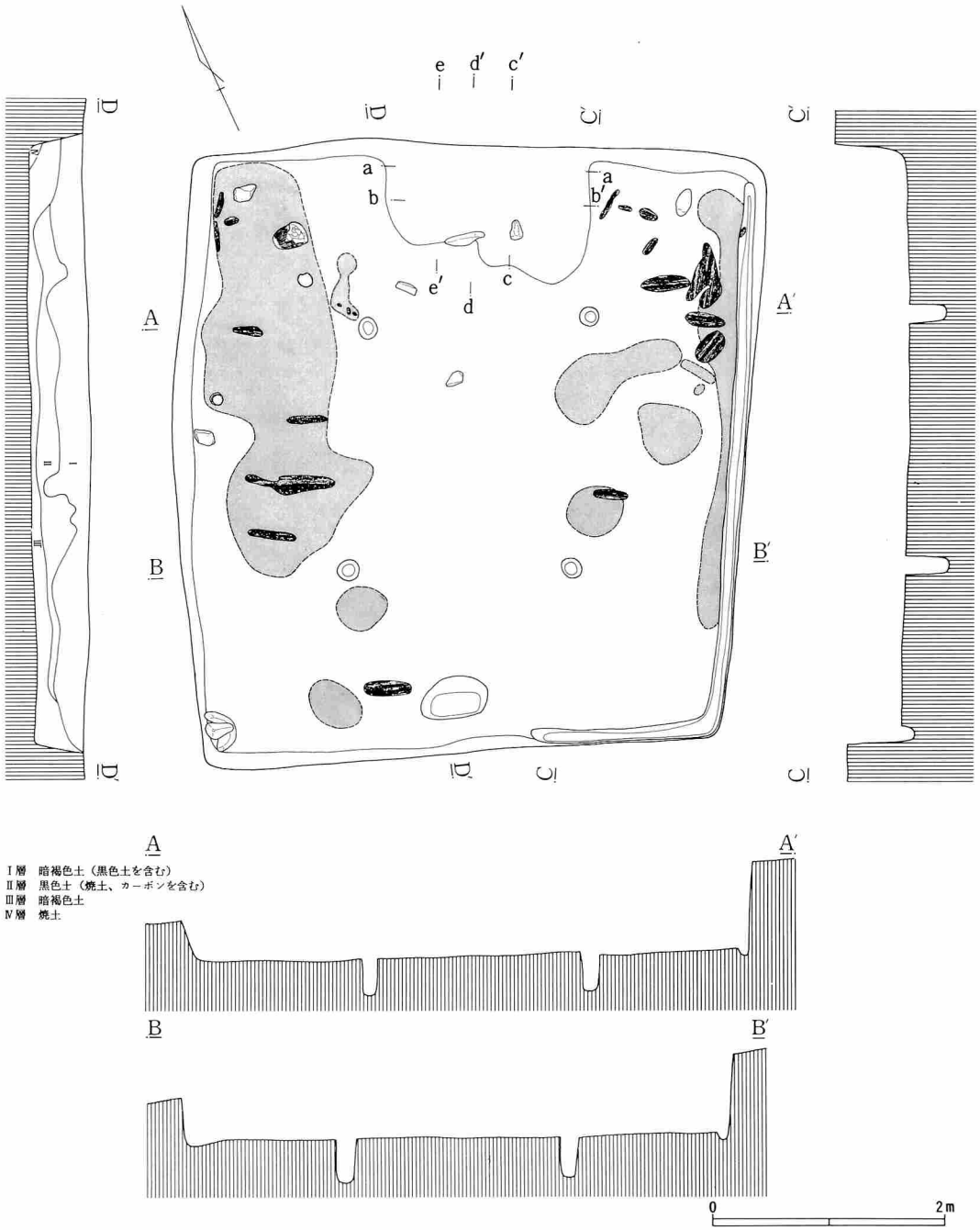
遺　構（第22図）

調査区東端に位置する。住居址平面形は、南北5.5m、東西5mの方形プランを呈し、主軸は磁北よりやや東に傾く。壁高は、遺構確認面より50cmを測り、ほぼ垂直に立ちあがる。柱穴は4本で各々の壁より1.5m程内側に設けられている。柱穴の径は15cmで、深さは床面より30～35cmほどを測る。東壁および南壁東側にかけて周溝が確認さ

れた。また、南壁の中央付近に、楕円形の掘り込みが検出されたが、これは梯子受け等の入口部の施設に伴うものと考えられる。

住居址東側と西側の床面には、夥しい量の焼土と炭化材が認められ、住居の上屋が火災によって焼け落ちたものと考えられる。

カマドは、北壁中央部に設けられ、全長3.6 m、幅2.4 mを測る。壁外の浅い掘り込みは



第22図　　手古松遺跡1号住居址実測図　（1／60）

煙出しに関連したものであろう。燃焼部は2.0 m×2.4 mの楕円形で床面より10*cm*程度掘り窪めている。両側の袖には、長さ50〜70*cm*の扁平な石を立てて袖石としている。焚口部から燃焼部にかけて焼土化が著しく、カマド断面に焼土層の厚い堆積が観察された。

出土遺物の大半は、住居址北側から発見され、特にカマド周辺部に集中する。出土した土器は合計28点を数え、器種も坏形土器、椀形土器、鉢形土器、手づくね土器、甕形土器、深鉢形土器、甑形土器など豊富な内容を示している。これらの土器は、おそらく突然の火災によって住居内におきざりにされたものであろうが、該期の土器組成を知る上では貴重な資料と考えられる。

出土遺物 (第25.26.27.28.29図)

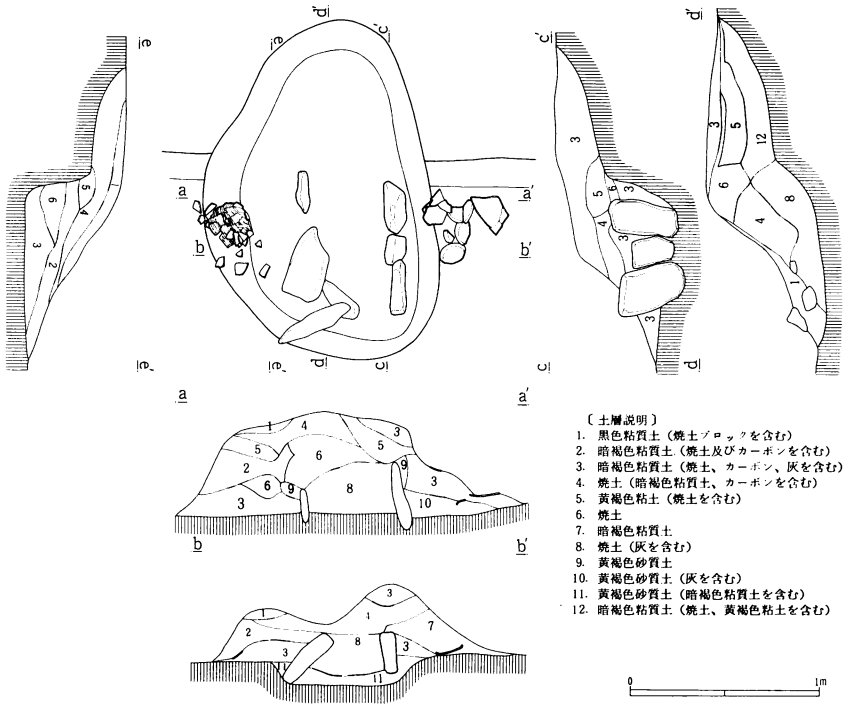
1号住居址出土遺物は、覆土内に混入した縄文土器片と弥生土器片を除いて全て土師器である。須恵器、鉄製品、石製品等の伴出は認められない。

坏形土器A類(第25図1.2.4.5.7.8.10.11.13.14)

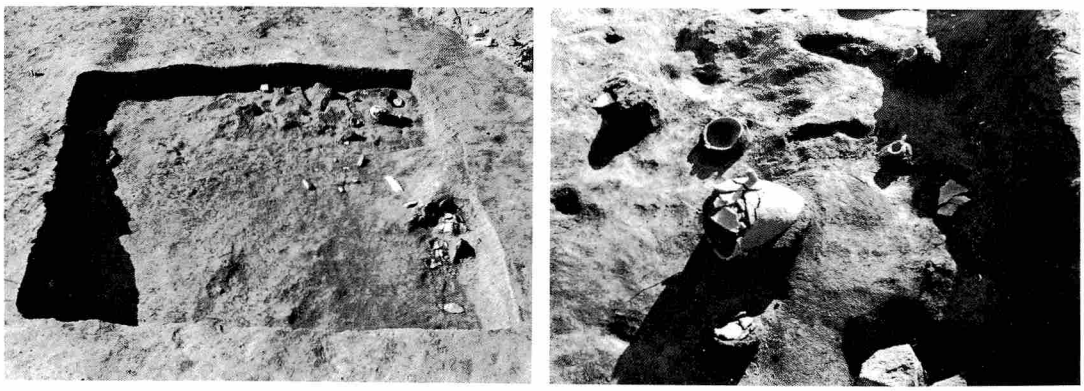
口縁下に稜を有する坏形土器で、口縁部の形態は直立するものとやや外反するものがある。

1は、口径14.8*cm*、底径5.0*cm*、器高4.1*cm*を測る。外面口縁部および内面はヨコナデ、外面胴下半部から底部にかけてはヘラケズリ調整が施される。胎土は、細かい長石粒や赤色粒子を含み精選されている。色調は、内外面とも赤褐色を呈する。

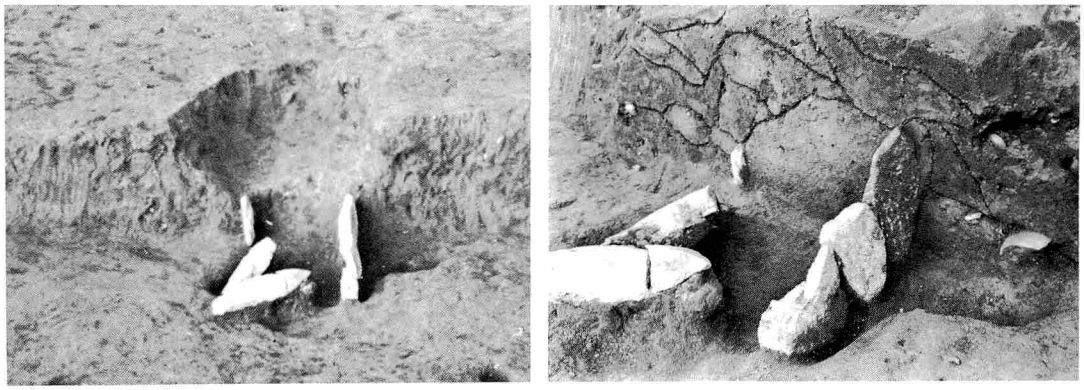
2は、口径12.9*cm*、底径4.0*cm*、器高3.2*cm* と推定される。頸部のくびれが強く、口縁部はほぼ直立する。調整は1と同様、ヨコナデとヘラケズリを用いている。色調は淡褐色を呈する。



第23図　手古松遺跡1号住居址カマド実測図　(1/40)



(1)　遺物出土状況



(2)　カマド

(3)　住居址完掘状況

第24図　　手古松遺跡１号住居址写真

4は、口径14.0cm、 底径6.0cm、器高3.4cm を測る。口縁部はやや外反し、稜は弱い。調整は、1と同様である。色調は淡褐色を呈する。

5は、口径13.8cm、底径5.9cm、器高3.0cm を測る。調整は1と同じである。器表面の色調は暗褐色であるが、外面口縁と内面のところどころにウルシと考えられる光沢のある黒色塗彩が認められる。

7は、口径14.0cm、底径7.0cm、器高3.2cmを測る。 調整は、1と同じ手法で施される。色調は暗褐色を呈し、胎土は精選されている。

8は、口径13.9cm、底径4.0cm、器高3.6cmを測り、 口縁下の稜はきわめて弱い。調整は1と同じ手法を用いる。色調は、外面淡褐色、内面黒褐色で、赤色塗彩の痕跡を残している。胎土は精選されている。

10は、口径13.7cm、底径5.0cm、器高3.6cm を測り、口縁部は外反する。調整手法は1と同じ。色調は、外面淡褐色、内面黒褐色を呈する。胎土は、赤色小粒子を含み精選されている。

11は、胴下半部の破片である。底径は2.0cmを測る。底部付近にヘラケズリ調整痕を残している。色調は褐色を呈する。

13は、口径14.2cm、底径2.9cm、器高3.75cmを測る。調整手法は1と同じ。器表面の剝離が著しいが、口縁部に赤色塗彩を残す。素地の色調は茶褐色で、底部付近は黒褐色を呈する。胎土は、長石粒を多量に含む。

14は、口径13.6cm、底径3.6cm、器高3.7cm と推定される。器表面の調整は、口縁外面ヨコナデ、胴下半部ヘラケズリ、内面ヘラミガキが施される。色調は褐色を呈する。胎土は長石粒子、赤色粒子を含み精選されている。

坏形土器B類 （第25図16. 17. 19 ）

口縁に稜をもたず、内湾するものを一括する。

16は、口径13.6cm、底径4.9cm、器高3.9cm を測る。器面調整はA類と同様、内面および外面口縁部にヨコナデ、外面胴下部にヘラケズリを施している。色調は褐色を呈し、赤色塗彩の痕跡を残す。胎土は、赤色小粒子、長石粒を含み精選されている。

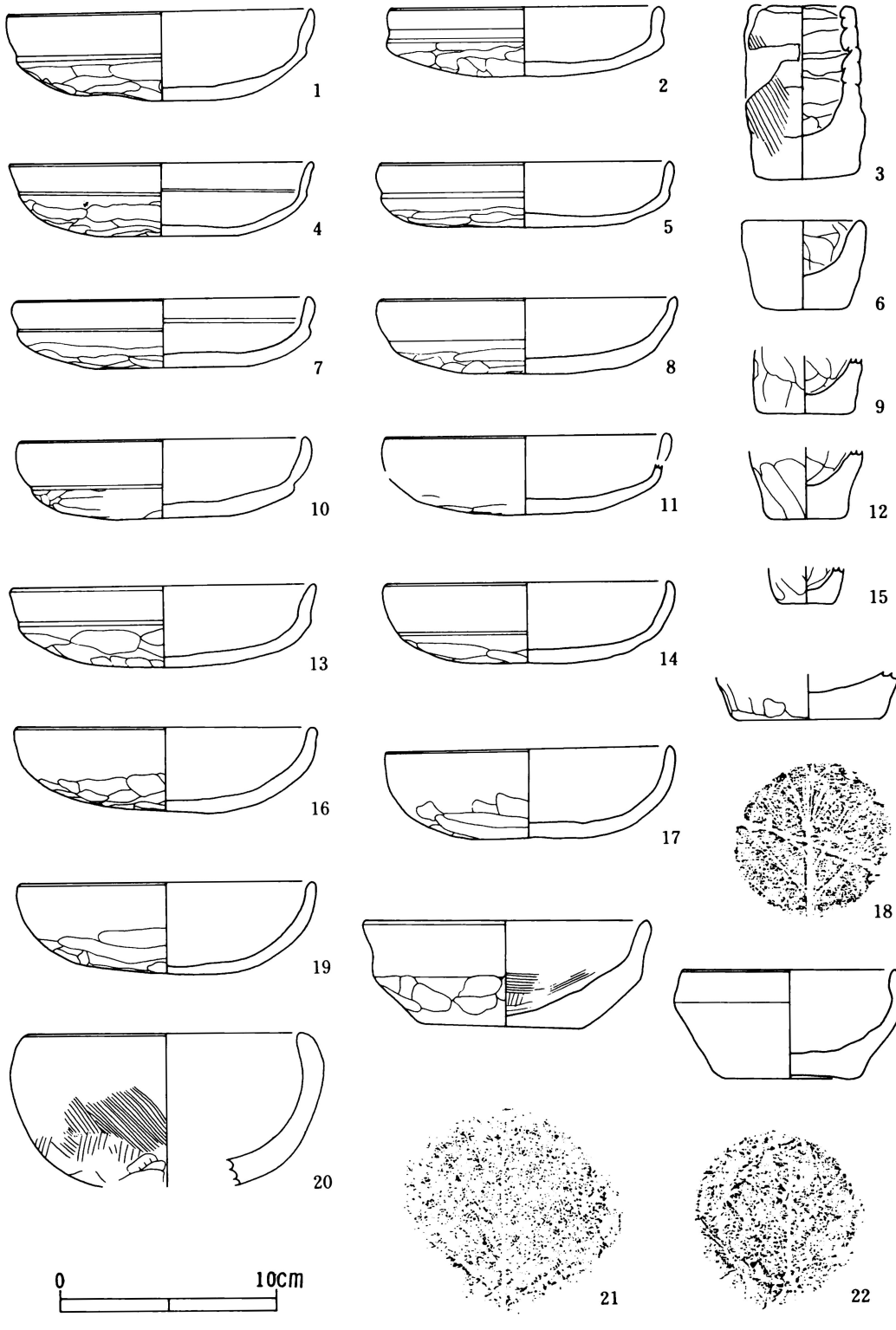
17は、口径13.5cm、底径5.4cm、器高4.2cm を測る。調整手法、色調、胎土は16に極めて類似する。赤色塗彩を内・外面に施している。

19は、口径13.8cm、底径3.9cm、器高4.2cm を測る。調整手法、色調、胎土、赤色塗彩の特徴は、16･17と共通している。

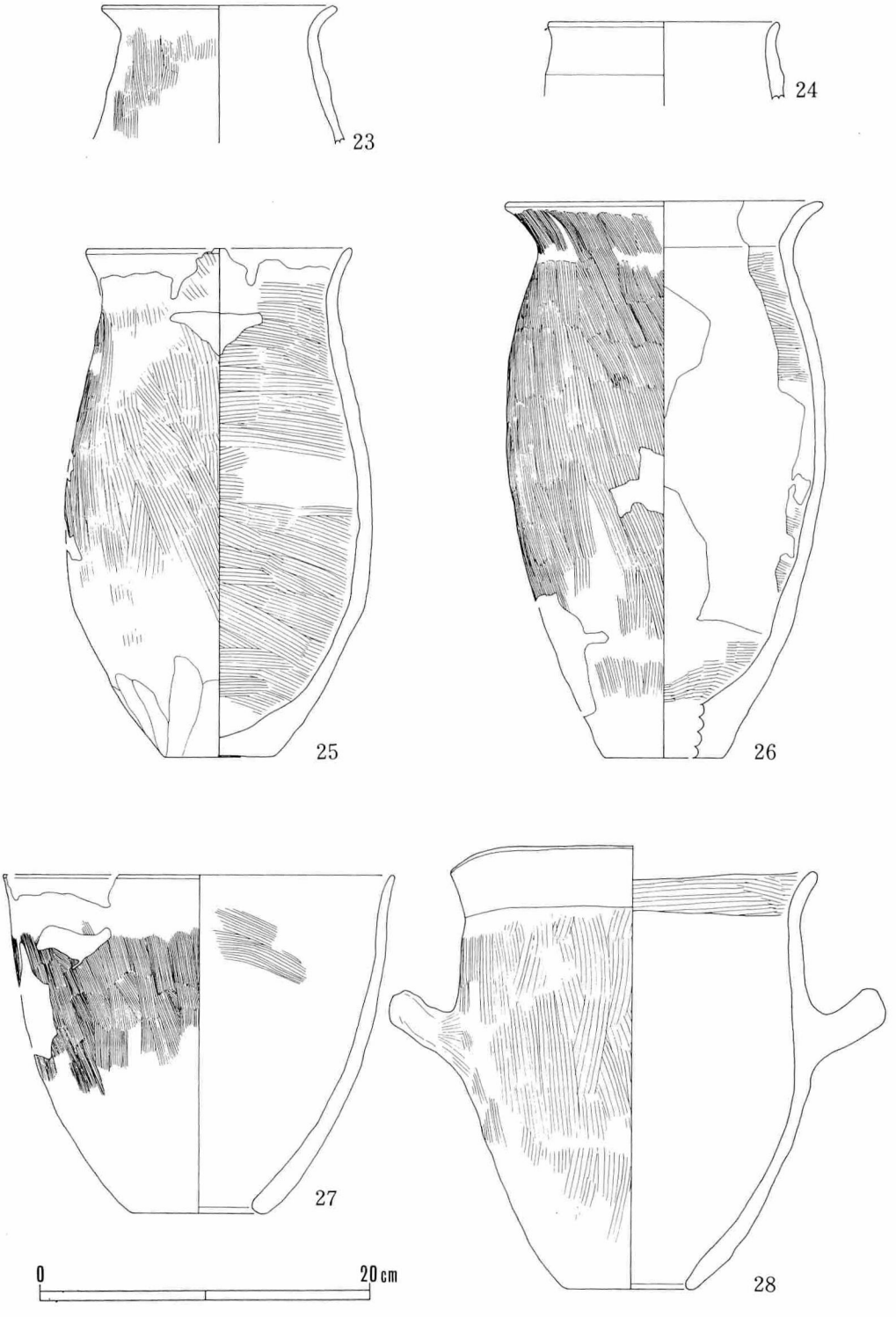
鉢形土器 （第25図21. 22 ）

21は、口径13.4cm、底径7.1cm、器高4.9cm を測り、口縁下が屈曲する。胴下半が肥厚し、底部に木葉痕が認められる。内外口縁部をナデ、内面底部にハケ目調整を施し、外面胴下部は指頭による整形痕を残す。色調は暗褐色である。

22は、21よりやや小型で、口径9.6cm、底径5.8cm、器高5.0cmを測る。口縁下が「く」の字状に屈曲する。底部に木葉痕を残し、内面および外面口縁部にはナデが施されている。色調は赤褐色を呈する。



第25図　　手古松遺跡１号住居址出土土器実測図　（1/3）



第26図　手古松遺跡１号住居址出土土器実測図　（1/3）

埦形土器（第25図20）

20は厚手の埦形土器で、口径14.6cm、器高7.5cmを測る。外面胴下半はハケ目とヘラケズリ、内面はナデが施される。色調は赤褐色を呈する。

手づくね土器（第25図3. 6. 9. 12. 15）

いずれも粗雑な手づくね土器で、輪積み痕を明瞭に残す例(3)もある。胴下部には、ヘラケズリが施されるものが多く、15の底部に木葉痕が認められる。色調は、3が暗褐色、6・9が茶褐色、12・15が赤褐色を呈する。

甕形土器A類（第26図23. 25. 26）

頸部がくびれ、口縁部が外反するものを一括した。

23は、胴上部の破片で、口径14.4cmと推定される。外面胴部に縦方向のハケ目調整を施す。胎土は粗い長石粒を含み、色調は暗褐色を呈する。

25は、口径16.2cm、底径6.6cm、器高31.0cmを測る。頸部のくびれは弱く、最大径は胴部中央よりやや下方にある。外面に縦方向、内面に横方向のハケ目調整を行い、外面胴下部にヘラケズリを施す。胎土は長石小粒子を含むが、23に比べると精選されている。色調は暗褐色を呈する。

26は、口径19.0cm、底径7.0cm、器高34.0cmを測る。頸部のくびれは3点中最も強く、口縁部が外反する。胴部最大径は、胴中央にあり、全体的に膨みのある形状を呈する。外面のほぼ全体に縦方向、内面胴部に横方向のハケ目調整を行っている。胎土は長石小粒子を含み、色調は暗褐色を呈する。

甕形土器B類（第26図24）

肩部にわずかな稜をもち、頸部のくびれは弱い。

24は、口縁部破片で口径14.0cmと推定される。口唇端部が丸味をおび、外側にわずかに張り出す。口縁部は、ヘラ状工具によるヨコナデが施されている。胎土は長石粒を多く含み、色調は茶褐色を呈する。

甑形土器A類（第26図27）

把手をもたない甑形土器である。

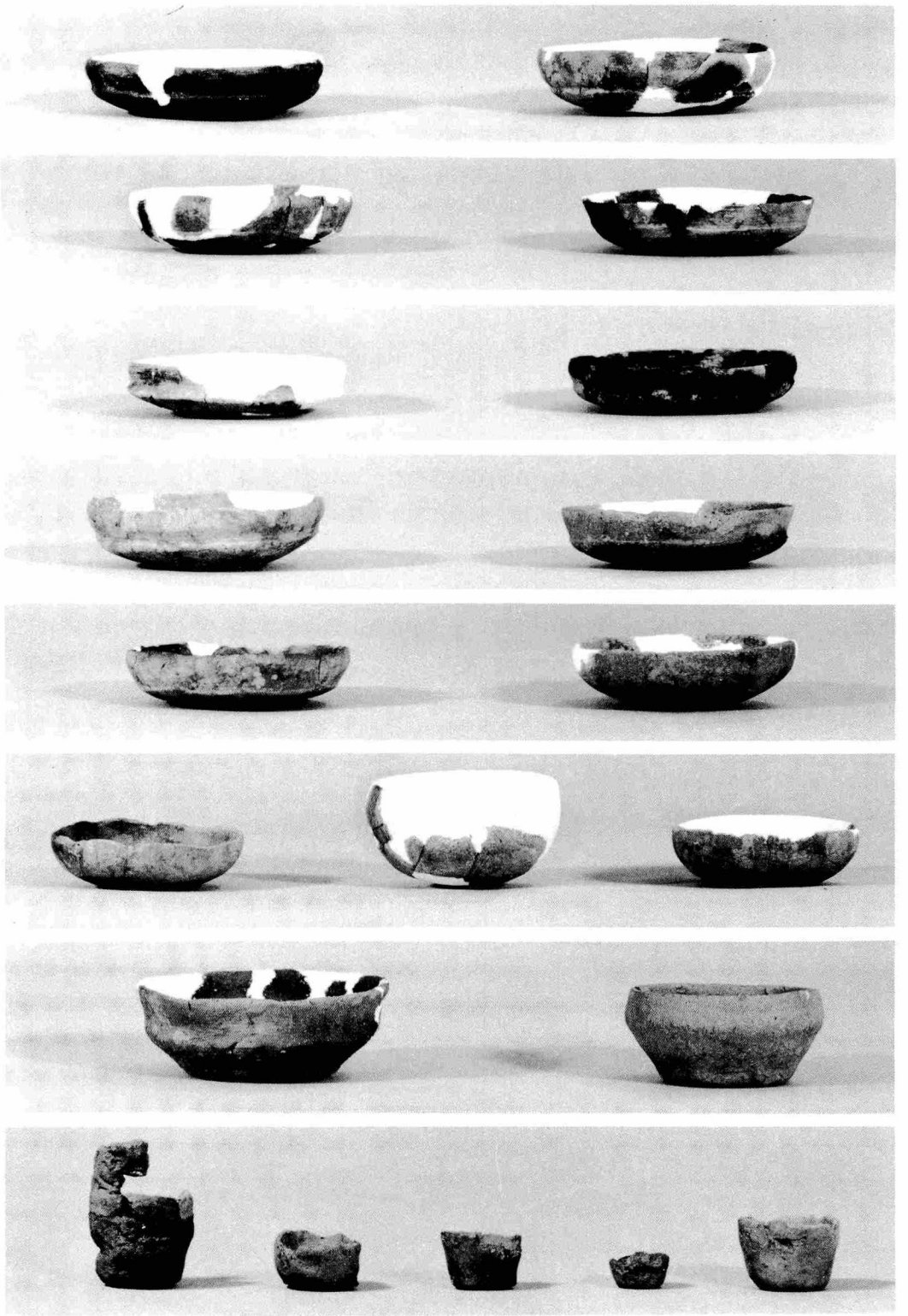
27は、口径23.8cm、器高21.0cm を測り、胴部が深鉢状を呈する。口縁部はヘラ状工具によるヨコナデ、外面の胴部上半にはハケ目調整が施される。胎土は長石粒子を多量に含み、色調は茶褐色を呈する。

甑形土器B類（第26図28）

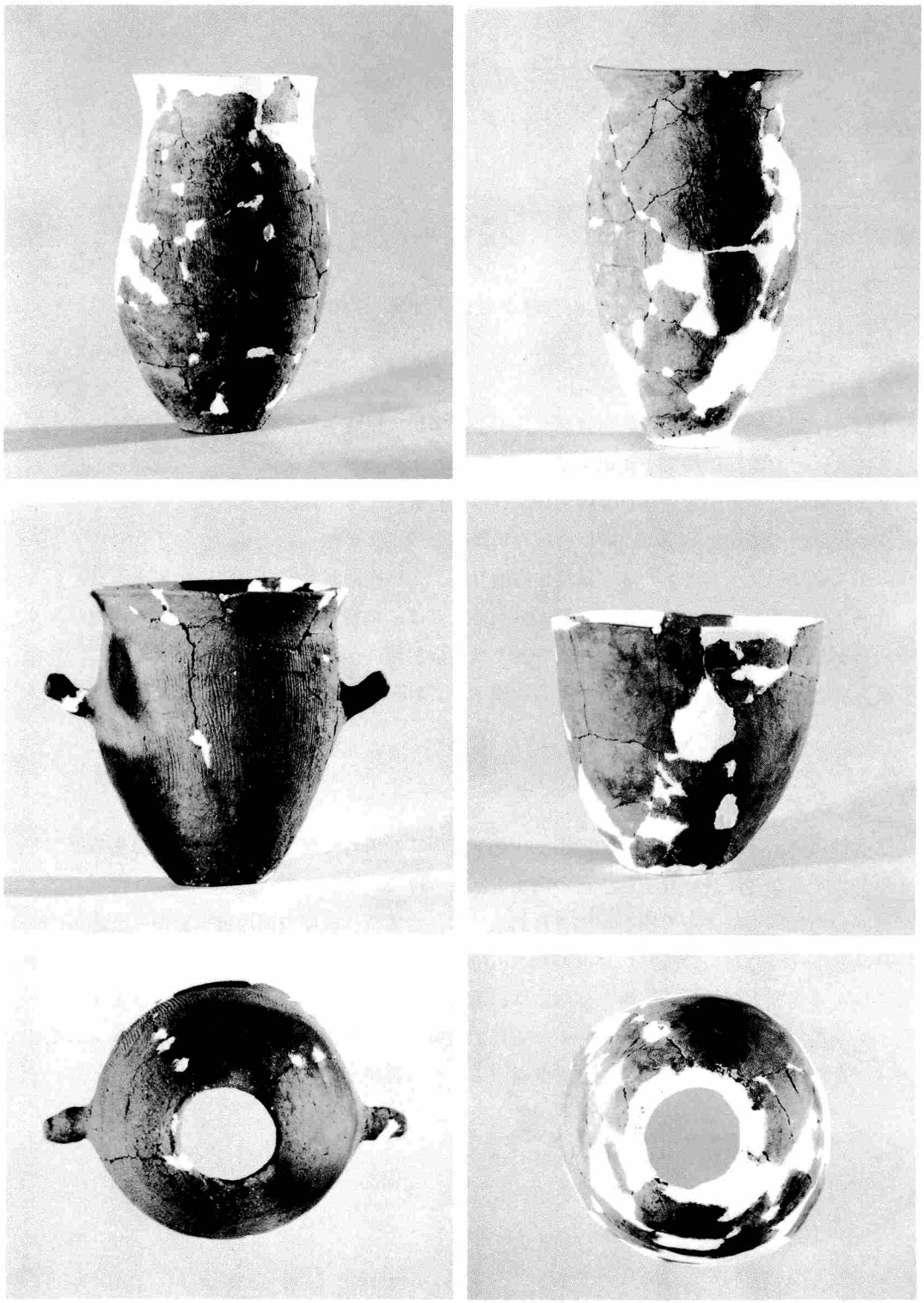
胴部に把手を有する甑形土器である。

28は、口径22.4cm、 底部付近の径8cm、器高27.2cmを測る。口縁は平縁であるが、高低差が著しい。口縁外面はヘラ状工具によるヨコナデ、内面は横方向のハケ目を施し、外面胴部には縦方向のハケ目痕を有する。胎土は粗く、色調は茶褐色を呈する。

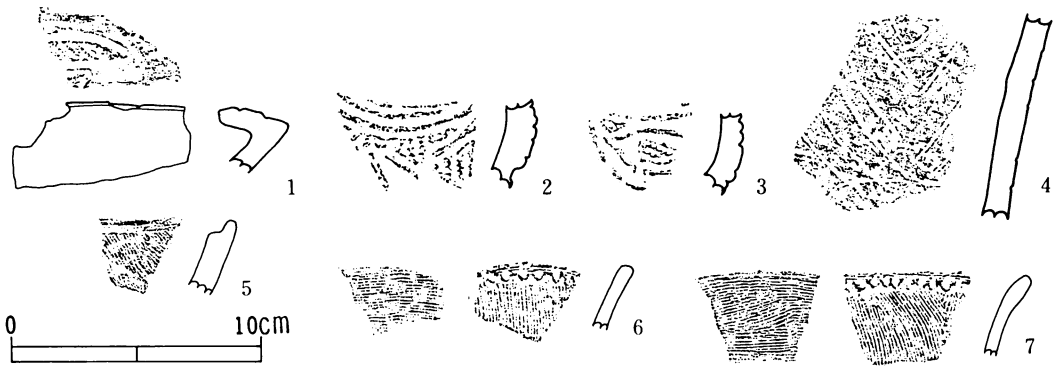
以上の住居址内一括土器は、その特徴から7世紀初頭に比定される。



第27図　　手古松遺跡１号住居址出土土器写真



第28図　　手古松遺跡１号住居址出土土器写真



第29図　手古松遺跡１号住居址覆土内出土土器拓本（1/3）

覆土内出土土器（第29図１～７）

１は、浅鉢形土器口縁部で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。口縁平坦部に沈線による区画を施し、その内部に縄文を充填する。

２・３は同一個体と考えられ、縄文および半截竹管による平行沈線を特徴とする。

４は深鉢形土器胴部破片で、縦位の綾杉状沈線と列点文を施している。

以上４点は縄文土器で１～３が前期末諸磯ｂ式、４が後期前半堀之内式に比定される。

５～７は、甕形土器口縁部破片と考えられる。５は、口唇下にヘラ状工具による沈線が巡り、その下をハケ目により調整している。６・７は、口唇端にヘラ状工具による刻目を有し、外面に縦方向、内面に横方向の細かいハケ目を施す。これらの土器は、弥生時代後期後半に比定される。

4. まとめ

手古松遺跡１号住居址は、遺物の出土状態や床面に堆積した焼土、炭化材から焼失家屋と考えられ、それが逆に良好な一括土器の出土を結果づけている。

今回の発掘調査によって明らかにされた遺構は、古墳時代後期の住居址１軒のみであったが、これは既に述べた様に調査区が尾根の西端に位置することに起因するものであろう。調査区東方に広がる尾根上の比較的平坦な地域には、遺物散布地が広がり、さらに遺跡が拡大することを示唆している。後期古墳の多く分布する周辺地域において、同時期の居住区が発見されたことは、今後該期の集落と墓域の関係を解明する１つの資料となりうるであろう。

Ⅳ　市川北遺跡

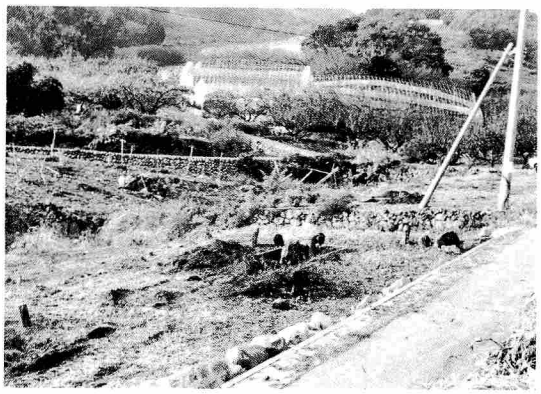
1.　調査経過

昭和58年11月10日に試掘調査を実施した。調査は、対象区域となる580㎡内に2m×1.5mの試掘坑を5ヵ所設置し、遺構確認を行った（第32図）。

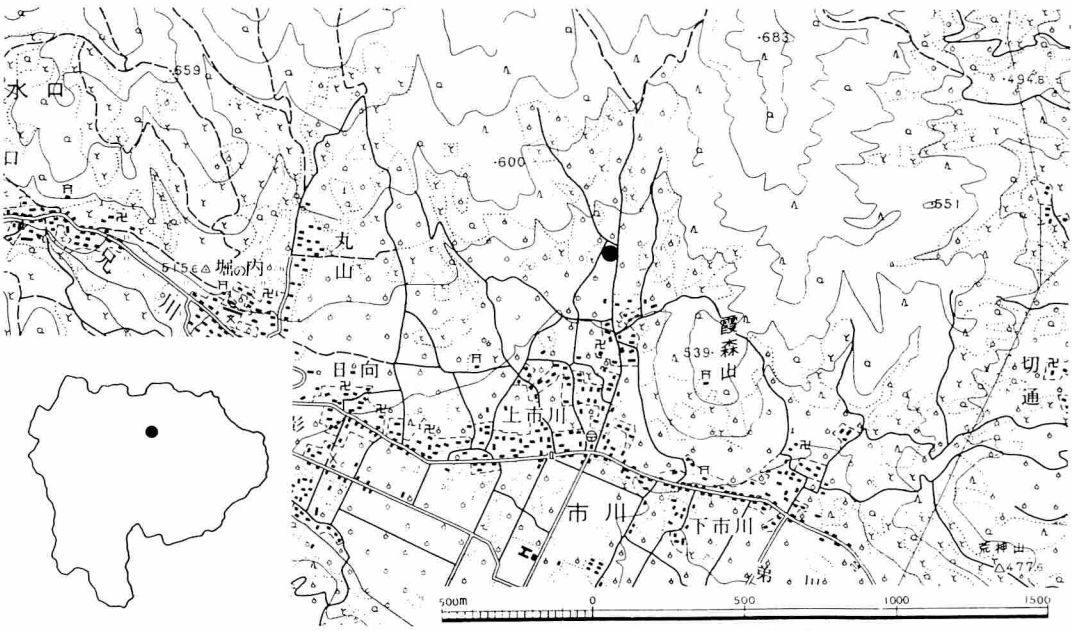
2.　遺跡と周辺の環境

市川北遺跡は、山梨市市川平丸に位置する。標高845mの天狗山山腹の南斜面に立地し、南方には、兄川によって形成された扇状地がひらけている。遺跡の東側は、標高539mの霞森山が南方にせり出しており、遺跡から東方への視界をはばんでいる。

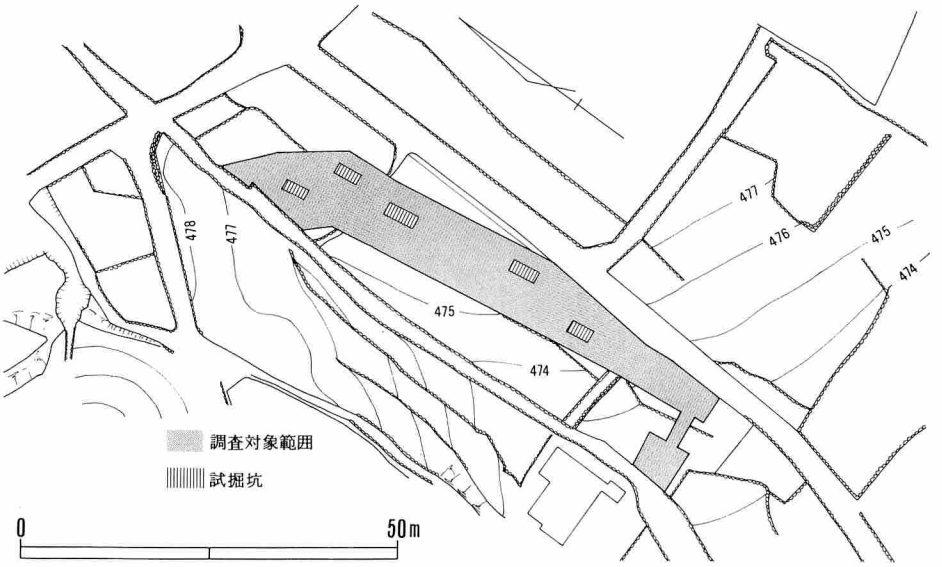
兄川と弟川の2河川によって形成された扇状地は、南北の山に囲まれて比較的小規模で扇端部付近においてもその幅は1.5Km程度である。この扇状地上には、扇頂部の大工北遺跡、大工南遺跡、扇央部の市川西遺跡、江曽原遺跡、扇端部の市川東遺跡など縄文、古墳、平安時代の遺跡が存在する。また、扇端部の兄川河床からはナウマン象の臼歯が発見され



第30図　市川北遺跡遠景写真



第31図　　市川北遺跡位置図　　（1/25,000）



第32図　　市川北遺跡調査区域図　（1／1,000）

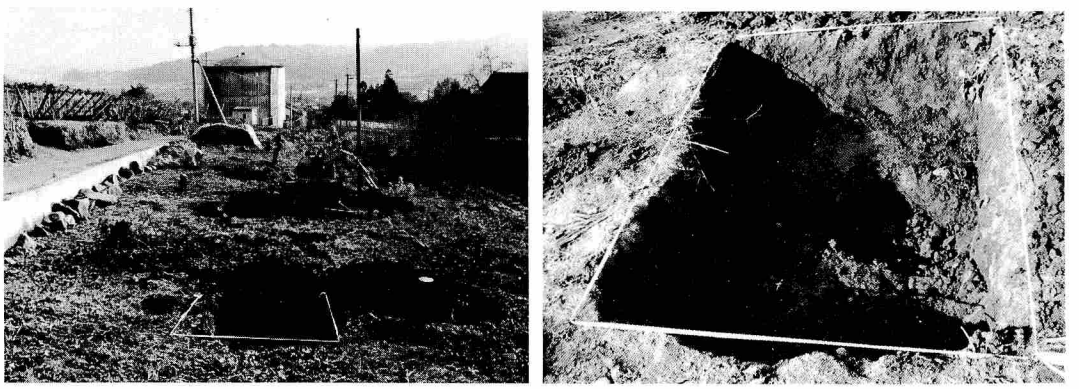
ており、先土器時代において付近に象が生息していたことが知られている。

市川北遺跡は、昭和53年に分布調査において明らかにされた遺跡で、150 × 100 m程の範囲に、縄文時代中期の土器片、石鏃、凹石、チャート片等が散布する。

3. 調査結果

地表下40～50cm程の深さで、全ての試掘坑において礫層が確認された。

遺構、遺物は全く発見されず、調査区内に遺跡は存在しないことが判明した。



第33図　市川北遺跡試掘坑写真

V　勝沼氏館跡

1.　調査経過

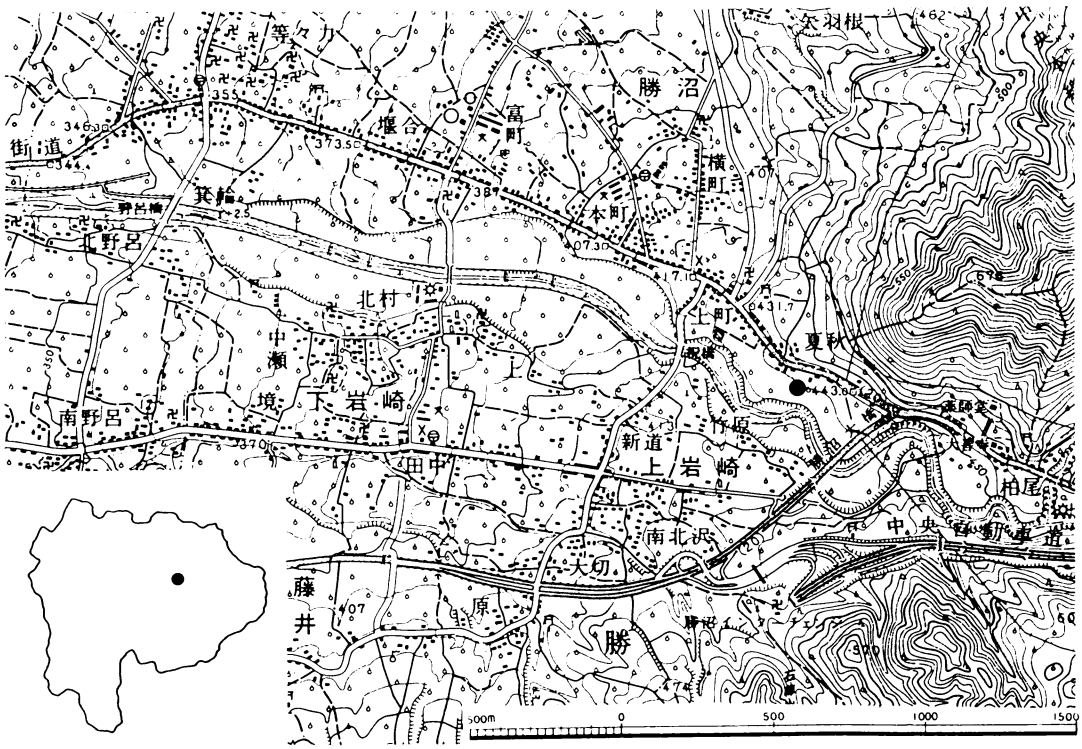
昭和58年12月14日、15日に試掘調査を実施した。

今回の調査対象区域は、勝沼氏館跡中核部より東方400ｍに位置するため、館跡に伴う土塁の存在が予測された。調査区の一画に、１カ所トレンチを設定し、重機により基盤層まで掘削し、土層断面の観察を行った（第36図）。

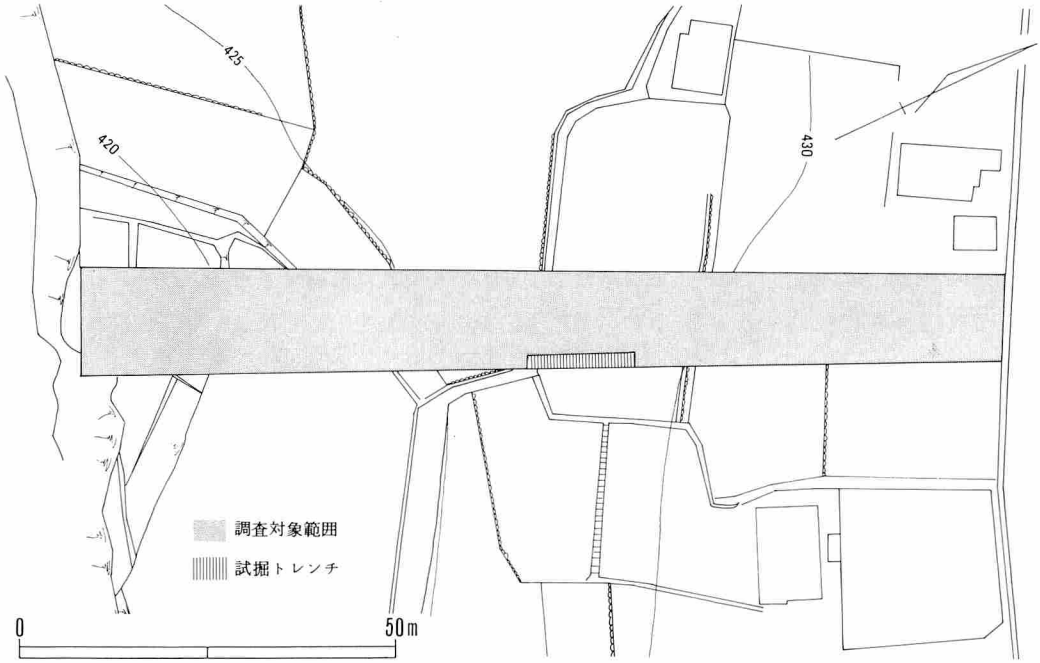
2.　遺跡と周辺の環境

勝沼氏館跡は、東山梨郡勝沼町勝沼地内に所在する中世の館跡である。甲州街道に沿い、日川右岸の河岸段丘上標高420～430ｍに立地する。館跡の南側を流れる日川は、大菩薩嶺に源をもち、柏尾付近から扇状地を形成しつつさらに西流を続け、笛吹川と合流する。この日川が甲府盆地へ流れ出る周辺地域には、岩崎氏館跡や大善寺などの中世遺跡や建築も少なくない。また、柏尾白山平からは、古代末期の経塚が発見された。付近は、郡内地方と国中地方を結ぶ中間地点に位置するため、中世以降軍事的にも経済的にも重要な地域であったことが窺える。

本館跡は、昭和48年県立ワインセンター誘致のための事前調査において、中世遺構の良好な



第34図　　勝沼氏館跡調査区位置図　　（1／25,000）

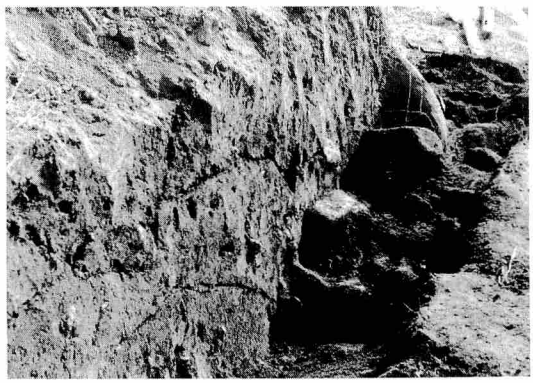


第35図　　勝沼氏館跡調査区域図　（1／1,000）

遺存状況が確認されたため、以後5年間7次にわたる調査が行われた。その結果、県内でも有数の中世館跡の様相が浮き彫りにされた。そして、昭和54年国の史跡として指定され、現在その整備計画が進行している。

3. 調査結果

表土下20㎝より水田の床土と考えられる鉄分堆積層が確認された。その下部では、北側を削平し、南側に盛土を行って水田を形成した様子が観察された。しかし、予想された館跡内郭部の土塁のような盛土の状況は確認できず、本来この個所には土塁は存在しなかったものと判断される。



第36図　勝沼氏館跡試掘トレンチ写真

Ⅵ 藤 垈 遺 跡

1. 調査経過

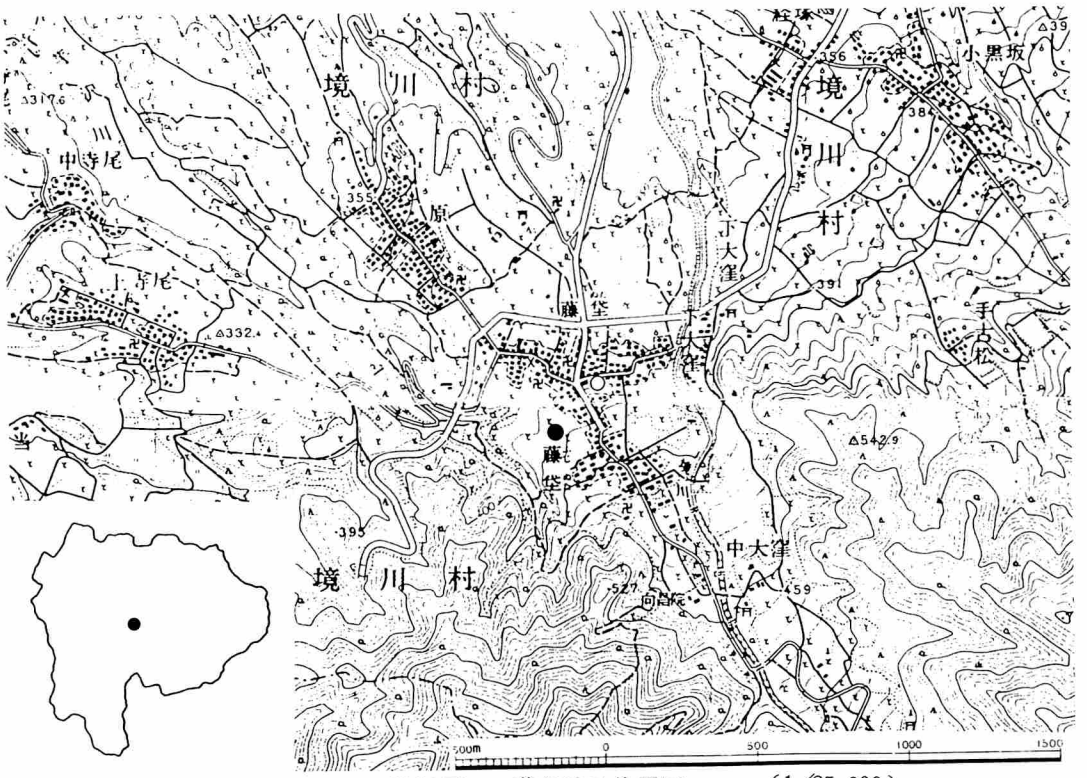
昭和58年11月17日に試掘調査を実施した。調査対象区域1740㎡内に、幅1mのトレンチを5本設定し、重機により掘削を行い、遺構の有無、土層の状態等について観察した（第40図）。トレンチの長さは、延べ230mにおよんだ。

2. 遺跡と周辺の環境

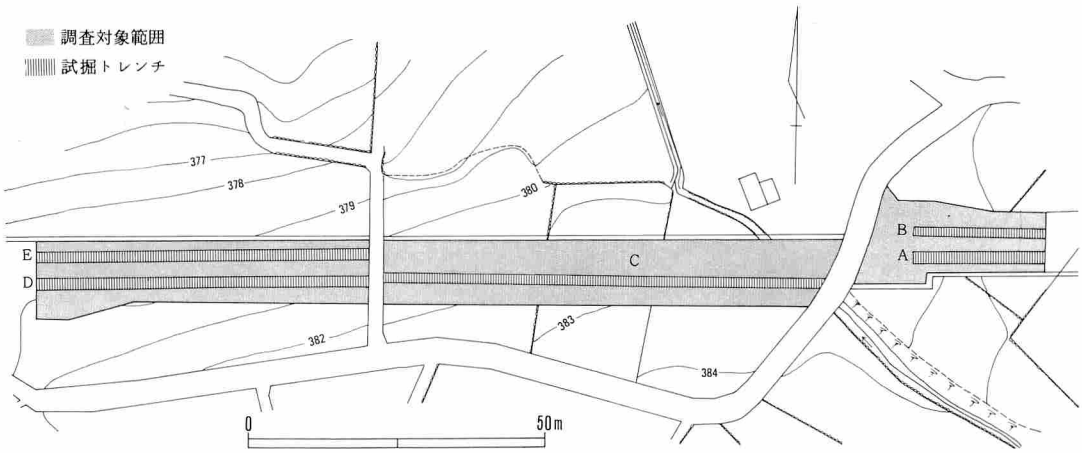
藤垈遺跡は、東八代郡境川村藤垈地内に所在する。芋沢川によって形成された小扇状地上の扇央部に位置し、標高380mを測る。芋沢川は、御坂山系に水源をもち、本遺跡西側に深い谷を形成しながら甲府盆地へと流出し、笛吹川と合流する。

甲府盆地南東部の曽根丘陵には、先土器時代以降の遺跡が数多く存在するが、その

第37図　藤垈遺跡遠景写真



第38図　藤垈遺跡位置図　（1／25,000）



第39図　　藤垈遺跡調査区域図　（1／1,250）

一角にある本遺跡周辺部においても例外ではない。付近には、縄文時代の遺跡や古墳時代に須恵器の生産を行ったとされる牛居沢窯跡が存在する。

3. 調査結果

遺構・遺物は全く発見されなかった。調査範囲外においては若干の土器の散布が見られるが、調査地区には遺跡は存在しないと判断された。

Aトレンチ

Bトレンチ

Cトレンチ

Dトレンチ

第40図　藤垈遺跡試掘トレンチ写真

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第9集

妻神遺跡・真福寺遺跡・手古松遺跡・市川北遺跡
勝沼氏館跡・藤垈遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

印刷日　昭和60年3月10日
発行日　昭和60年3月15日
発行所　山梨県教育委員会
印刷所　㈱峡南堂印刷所